節句人形の『素朴なギモン』コーナー

Vol.77

重陽の節句

五節句の中で、あまり知られていないのが「重陽の節句」かもしれません。この日は不老長寿を願って菊酒を飲みます。「重陽の節句」とは何か。どのように祝うのか。「菊の節句」とも言われる重陽の節句について調べました。

起源は古代中国にさかのぼる

陰暦の9月9日は五節句の一つである。1月7日の人日、3月3日の上巳、5月5日の端午、7月7日の七夕、最後が9月9日の重陽となる。重陽とは一番大きい陽数（奇数）である「9」が二つ重なる日であり、「陽が極まって陰を生ずる」という陰陽思想から一年の中でも非常に危険な日と考えられた。そのため、厄除けの行事が必要とされたのである。

重陽の節句は中国から渡って来た。古代中国では重陽の日には「登高」といって高い所に登ったり、不老長寿の薬であると考えられていた菊の花を浮かべた菊酒を酌み交わしたりして、お互いの長寿や無病息災を祈った。日本でも他の節句と同じように、穢れを祓う慣習として始まったとされる。

江戸の一大イベントだった

日本では、平安時代から宮中で「茱萸袋」を御帳に掛けて邪気を祓った。これは茱萸と菊の造花を赤い袋に挿した中国由来の飾り物で、端午の節句の際の薬玉と掛け替える習わしだった。

江戸時代、江戸城では巳の刻、10時半頃から重陽の節句の式次第がスタートした。将軍は御三家・老中との面会が終了した後、花色（薄い藍色）の小袖に長袴を着用し、主に来客を通すのに使われた白書院と呼ばれる部屋に行く。そこにいる大名たちも、花色の紋付小袖に長袴を着用。大名の挨拶が終わると、将軍は大広間に移動し、下位の諸侯の挨拶を受ける。そして、大名たちが将軍に献上した菊の花を愛でながら盃に菊を浮かべて飲んだ。

また宮中では、「菊の被綿」という風習が行われた。重陽の節句の前夜に菊の花に真綿をかぶせて、菊の香りと露を染み込ませておいて、重陽の日にその綿で身体を拭うと延命すると言われた。被綿の情景は『枕草子』『紫式部日記』にも綴られている。

江戸時代には一般の武家も庭先に菊の鉢植えを並べ、重陽の日は裃姿で菊酒を飲んだ。市岡正一著『徳川盛世録』には武家の家族が揃って菊酒を飲む様子が描かれている。菊酒が入っている長柄の銚子には菊がこんもりと盛られていて、公家が盃に菊を浮かべて優雅に嗜む様子とは異なることが分かる。

農民や庶民も菊の花弁を浮かべて酒を飲んだり、栗ご飯を食べたりした。重陽の節句が「菊の節句」や「栗の節句」と呼ばれる理由はここにある。

この日は秋という季節柄、衣替えの時でもあり、裏地のついた着物に綿を入れて冬に備えた。

「豊歳五節句遊」
（国立国会図書館デジタルコレクション）

《監修　林直輝（日本人形文化研究所所長）／参考資料　河合敦監修『歴史群像シリーズ特別編集　図解・江戸の四季と暮らし』（2009年、株式会社学習研究所）など》